

誤りから学んで、積極的に発信！

——語法について



南出康世

はじめに

学習辞典が受信情報のみならず発信情報も載せ、ユーザーのニーズに応えるのが *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (1942) 以来、常識となった。しかし学習英和辞典の語法・文法情報の基準は辞書によってばらばらで、その多くは「編者の視点 (compiler perspective)」からなされており、ユーザーのニーズを満たしていない内容のものも少なくない。学習英和辞典はユーザーの視点に立って、発信のための実用的な語法・文法情報をできるだけ多く提供しなければならない。以下、「さらに語法に強くなった G4」の語法に対する基本姿勢を紹介する。

1. 日本人学習者の言語的誤用 (linguistic error)

日本人学習者に特徴的に表れる誤りには大きく分けて2つのタイプがある。1つは言語的誤用 [統語, 形態, 発音上の誤り], もう1つは語用論的誤用 (pragmatic error) [談話のストラテジーの誤り] である。この2つにはそれぞれ「日本語の干渉に起因する誤用」(interlanguage error) と日本語の干渉によらない、いわゆる「言語内誤用」(intralingual error) がある。

「日本語の干渉による言語誤用」(e.g. 「家をリフォームする」*reform a house / 「(体重が) リバウンドする」*rebound など) については独自の調査を行い、G4ではこの方面の記述はさらに強化された。最近では「学習者コーパス」の普及に伴い、より大規模に、より組織的にこの方面の研究が進みつつある。G4ではコーパスのみならず、

日本人に英語を教えた経験のある、そして同時に日本語にもある程度精通している英語ネイティブ・スピーカーの直観と判断をデータとして利用し万全を期した。

直接母語干渉に起因しない言語的誤用、即ち「言語内誤用」にはいくつかのタイプがあるが、スペースの都合で2例のみあげる。

- (1) 「私のことは心配しないで下さい」×**Don't be anxious** about me. [通例 **Don't worry** [**Don't be worried**] about me. で, anxious は She's extremely anxious about her exam. のように「成り行きや結果が心配」の文脈で用いるのが普通]
- (2) **I thought so.** は文字通りには「私はそう思った」で **I think so.** (私はそう思う) の過去形だが、しばしば疑念が的中したときに用い「思った通りだ」「そらみる」といった非難めいた発話の力を持つ。

「言語内誤用」を考える点で、native-like selection / native-like fluency という概念も重要である。たとえば、パーティーの予定があって、「ハリーを連れてきてくれるとありがたいです」と誰かに言う場面では、(3)が普通で(もちろんほかにも自然な言い方は多数ある)、(4)(5)は文法的には正しいが不自然である。

- (3) I'll be glad that you could bring Harry.
- (4) That you could bring Harry will gladden me

so much.

(5) Your bringing of Harry will cause me to be so glad.

英語には(3)のような lexical phrase (決まり文句) が多数あり、ネイティブ・スピーカーは場面に応じて必要な型をそのまま、あるいは適当に語彙を入れ替えるだけで無意識的に「選択」という。これを用いなくて、文法規則を操作して文を創造すると、(4)(5)のように文法的だが不自然な文になり「流暢さ」から遠ざかるのである。G4ではこの lexical phrase の収録にさらに力を入れ、ますます高まるオーラル・コミュニケーションのニーズに応える情報を盛り込んだ。

II. 語用論的誤用

日本語圏では物を贈呈する場合、しばしば「お気に召さないかもしれませんが,」「そんなものをいただくわけにはまいりません」といった発話が生じる。我々はこのような場面における解釈ルールを身につけているので、発話の意図を正しく理解できるが、この談話のストラテジーを英語に持ち込んで I'm afraid you don't like it. のように言うと支障が生じる。

一般的に言って、ネイティブ・スピーカーは外国人が犯す言語的エラーに対して寛容的である。例えば、我々が We went swimming to the river. と言っても、「川へ泳ぎながら行った」という意味に取られる可能性は少ない。in と to の混同であろうと推測してくれる。

しかし、言語のパターンを認識している英米人でも談話のストラテジーの相違にまでは気が回らないのが普通である。従って、I'm afraid you don't like it. は英米人にとっては文字通りの「お気に召さないかもしれませんが」という意味でしかありえないので、このようなことを言って贈り物をする日本人は「変な日本人」の烙印をおされかねない。日本語にはこのように本音を建前に先行

させる談話のストラテジーは存在しないことはないが、きわめて影が薄い。このように語用論的誤用は言語形式面だけでなく社会的・文化的行為と密接に関連するので、単に「こう言わない」という皮相的な記述だけでは不十分である。

次に「言語内誤用」の例をあげる。たとえば、“Please read this paper and give me your comments.”である。これは文法的には問題はないが、依頼される側は過大な負担を押し付けられた感じがするようである。そのような場合、少しでも負担が軽くなるように表現するのが依頼のストラテジーである。“Please have a look at this paper...”のように言うと、日本語の「ちょっと」の気持ちが加わって丁寧さが増すようである。G4ではこの種の語用論的情報を随所に入れ、ユーザーの便を図った。

おわりに

EFL 学習者にとって、文法規則や文型に従って文を生成する文法能力を養成することは不可欠であり、また一方では、英語表現を「未分析のかたまり」(unanalyzed chunk)として、その語用論的機能を含めて学習することも不可欠である。G4はこの2つのニーズをできるだけ満たすよう最大の努力をした。

さらに、G4では以上見てきた「学習者が誤りやすい語法」に加えて、他の辞典では取上げていない最新の語法 (e.g. **The thing is** is no one wants to take responsibility for paying for it all. (s.v. *thing*)/ **India has among the highest** saving rates in the world. (s.v. *among*)/ **I can not not** take your advice. (s.v. *can*)) も多数解説した。「さらに語法に強くなった G4」に皆様の温かいご支持を乞う次第である。

(みなみで こうせい・大阪女子大学名誉教授)